

【研修報告】

「ICM 30th Triennial Congress in Prague」に参加して

中村 敦子*, 鈴木 美恵子*, 奥村 ゆかり*, 勝田 真由美*

はじめに

第30回国際助産師連盟大会（International Confederation of Midwives Congress, 以下ICM大会と呼ぶ）が2014年6月1日から5日までの5日間、チェコのプラハで開催された。ICMは世界各国の母親と子ども、家族へのケアの水準を向上させることを目指すとともに、助産学教育の振興を図り、助産の科学と技術に関する知識の普及を目的として



写真1 ICM大会オープニングセレモニー

いる。国際看護師協会 International Council of Nurses (ICN) においては、4年毎に学術集会在開催されているが、ICMでは3年毎に開催されている。近年のICM大会では約80カ国から3,000人以上の助産師が参加している。今回の大会では、126カ国3,800人の参加があり、その中で最も多い参加国は日本であった。

ICM大会について

ICM大会のスケジュールは表1に示す。開催初日はオープニングセレモニーと会長基調講演が催された。オープニングセレモニーにおける各国助産師の職業観をアピールした衣装や持参品等から、海外助産師のICMの掲げる目的への指向性の高さに圧倒された。2日目から研究発表やワークショップが行なわれ、研究発表では2日目「女性の健康と助産師の役割」、3日目「女性とその家族のためのより良いケアと成果」、4日目「助産師と女性の自律」、5日目「文化と習慣」というテーマのもと、世界各国の助産師による多くの研究が発表された。今回、

表1 大会スケジュール

Date	Contents
Sunday, 1 June	Opening Day Events and Social Programme Multifaith Celebration of Midwifery Opening Ceremony Welcome Reception Keynote lecture
Monday, 2 June	Plenary Workshop Bridging midwifery and women's health rights
Tuesday, 3 June	Plenary Workshop Access:bridging the gap to improving care and outcomes for women and their families
Wednesday, 4 June	Plenary Workshop Education:The bridge to midwifery and women's autonomy
Thursday, 5 June	Plenary Workshop Midwifery:bridging culture and practice

*日本赤十字広島看護大学

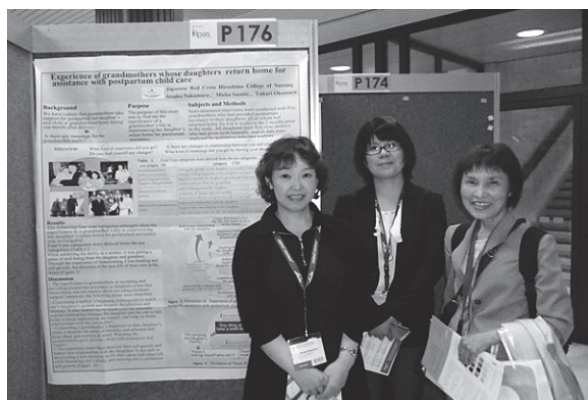


写真2 示説

中村らの研究は、産後の里帰りにおける祖母の育児支援がテーマであったため「文化と習慣」に分類され、5日目の示説での発表となった。90分間のセッションでは、台湾やポルトガル国籍助産師とのディスカッションを通じて、日本の伝統的な里帰りについてのメリット、デメリットを再認識した。

ワークショップは、産科的出血や胎児心拍数陣痛図の判読、研究デザインと方法、臨床実習における助産師教育等をテーマとして行なわれており、私達はベビータッチケアとシミュレーション教育に参加した。ベビータッチケアでは、児の心身の成長発達を促進し、母親のうつ的な気分を軽減し、母子双方に有益であることがわかった。シミュレーション教育では、Facebookの活用を推奨し、リアルタイムに世界的視野でディスカッションし、様々な職種の人からの助言を共有でき、卒業後を見越した人脈を作ることが出来ると説明していた。

昼食会や企業展示会場では、海外助産師との交流を楽しむことが出来た。ザンビアの助産師は同国における母子保健の3大問題点について、人的資源不足、薬や分娩に必要な物質的資源の不足、生活基盤の脆弱さであると語っていた。経済状態が悪化した国においては、物的に劣悪な出産環境に置かれ、助産師が不足しており、日本では認められていない男性助産師も活躍していた。ザンビアにおける助産師教育では、教育年数は日本と概ね同様の1年間であるが、分娩介助件数は年間100件におよび、日本での卒業要件である10件と比較し驚かされた。日本のような実習記録はないにしても、レポート提出は課せられているようだった。スロベニアの助産師とは、分娩介助技術の日本との相違について実技を交えて話し合い、安全な分娩介助技術について意見交換することができた。母体の会陰裂傷を予防し、児の分娩外傷を回避することを目指して介助していることは同様でも、介助技術に違いがあることは興味深



写真3 ザンビアの助産師との交流

かった。

研究発表の要約

1. 「Experience of grandmothers whose daughters return home for assistance with postpartum child care」(中村・鈴木・奥村)

日本においては出産後の女性が母親役割を獲得していく産後1ヶ月間の支援に、実家で過ごす里帰りがあり、江戸時代から慣例的に行なわれている。娘にとって、その主な支援者である実母からの支援は、産後の育児不安や抑うつ予防に好影響を及ぼし重要視されている。今尚変わらずに里帰り文化が伝承されている理由には、娘において意味があるだけでなく、実母において意味があるからではないかと推察された。

本研究では、実母を単なる育児支援者と捉えるのではなく、里帰りを引き受けた体験を実母の生涯発達において意味あることとして捉えたいと考えた。そこで、娘の産後の里帰りを引き受けた体験が、実母の人生においてどのような意味があるかを明らかにすることを目的とした。

研究方法は質的記述的研究デザイン。初産婦の娘の産後里帰りを4～6週間引き受け、その後の経過が2ヶ月以内の実母5名に、半構造化インタビューを行った。質的帰納的に分析しカテゴリー化した。

娘の産後里帰りを引き受けた実母の体験には、単なる育児支援ではなく、「娘の母親である喜びとして、娘の母、妻、人としての成長への喜びと愛着、親密性を深める」「娘夫婦の良好な関係性を見守り、娘夫婦の幸福に力添えし、娘の夫との関係性を形成する」「娘の子どもの祖母である幸福として、親密性と愛着を深め癒しを得、孫の成長に感動し活力を得る」「自己成長する自分に気づき、娘との新たな関係性を構築し、家族を大切にしながら、個としての自分の人生を大切にするという生き方の、新たな

方向性を見出し、発達し続ける自己に気づく」意味があることが明らかとなった。

2. 「Risk factors of Japanese father's depression at one month after delivery」(勝田, 西村明子(兵庫医療大学)ら)

研究代表者の西村が口頭発表を行った。産後の父親のうつ状態のリスクファクターを明らかにすることを目的に、自己記述式質問紙にて、妊娠末期から産後までの縦断調査を行った。その結果、産後一か月の父親のうつ状態のリスクファクターは、「妊娠期のうつ状態」、「ライフイベント」、「親との離別経験」、「精神的な問題で医療機関の受診歴がある」であり、父親と母親のうつ状態に関連はみられなかった。

おわりに

今回 ICM 大会に参加して世界各国の助産師の専門家としての意気込みにあふれた活動を実感し、ワークショップでは最新の知見を得、研究発表や昼食会、企業展示会場等では世界の助産師との有意義な交流時間を持つことが出来た。

本研究にご協力、ご指導いただいた皆様に深く感謝いたします。今回の発表は日本赤十字広島看護大学海外旅費助成を受けて行ないました。このような機会を与えてくださいました本大学に深く感謝いたします。

